町誌編さん室の

島のむんがたり

ノロの祭祀具を保管する「朱漆山水人物箔絵丸櫃」

朱漆山水人物箔絵丸櫃（シュウルシサンスイジンブツハクエマルビツ）

郷土資料館の展示品の一つに、「朱漆山水人物箔絵丸櫃（シュウルシサンスイジンブツハクエマルビツ）」と称される琉球漆器があります。この漆器は、手々集落の山田忠一氏の寄贈で、手々ノロ資料の1つとして、昭和42年に町指定有形文化財（美術工芸品）に指定されました。

琉球王国時代の漆器は、琉球王朝における中国や日本への献上品であり、琉球国内では王族やノロなど高位の階層のみが用いることを許されたものです。特にノロの丸櫃漆器は、琉球漆芸の歴史を語る上で重要な一級資料とされています。

しかしながら、本丸櫃は収蔵当時からの傷みが激しいことから、文化財としてのみならず芸術品としての価値を保全することの重要性を鑑み、本町の「ふるさと納税活用事業」及び（公財）三菱財団の「文化財保存修復事業助成」を申請し、保存修復の必要性を訴えました。これらの事業が採択されたことから、約1年半かけて修復事業を進めているところです。

修復完了後は、琉球王国が築き上げた独自の漆芸文化を表すものとして、後世へ長く伝えることが可能な歴史的価値の高い文化財として、誇れるものになるはずです。

さて、本丸櫃は、祭祀装具一式の内、勾玉などを納めるものとして、琉球王より神女（ノロ）へ下賜されたもので、直径は24・4センチ、高さが22・3センチ、色鮮やかな朱色の上に沈金で文様が描かれ、琉球漆器の緻密さや大胆さが表現されています。

では、なぜこのように重要な工芸品がノロへ使わされたのでしょうか。奄美群島は薩摩藩による琉球侵攻により、男性優位の武家社会の政治制度が持ち込まれましたが、琉球王朝時代のノロは神女と表記され、集落行事などをつかさどる重要な役割を担っていました。いまでこそ、男女共同参画で男女差のない社会づくりに取り組もうなどとしていますが、当時は女性も支配者階級の一員としての重責を果たしていたのです。

徳之島に残るノロに関する伝承を通して、琉球王国との関係、島の統治の状況などを次回から紹介させて頂きます。

（郷土資料館長　遠藤　智）

問 郷土資料館
☎0997-82-2908